

## 渡辺直経教授を送る

尾本 恵 市（人類）

人類学第二講座の渡辺直経教授（チョッケイ先生の愛称で通っているが、無論ナオツネが正しい）がこの三月一杯で停年退官される。私としては、学生時代より22年間ご指導いただいたことになり、今更ながら月日のたつ早さを感じている。教授はこの数年間ますますお元気で、理学部的法による考古学の研究に関する特定研究や、ジャワ島の人類化石を含む地層の調査などに八面六臂のご活躍ぶりであり、とても停年まぢかのお年には見えない。われわれとしても残念であり、教授もお心残りの点もあろう。しかし、今後は教室を離れて日本の人類学の発展のためにご活躍され、また時間的余裕も生ずるかと思うので、ご著書の完成などをわれわれ後輩としては期待している次第である。

渡辺教授のご専門は年代学、とくに物理・化学的手法により遺跡や遺物の時代の古さを推定する学問である。土器が焼かれたときに固定された地磁気の方法を測定する熱残留磁気法や、黒曜石（石器の材料）などの中の $^{238}\text{U}$ の自然核分裂の飛跡をかぞえるフィッション・トラック法などは、教授によりはじめてわが国の遺跡に応用された。今日、理学的方法による考古学がわが国でもようやくポピュラーな

ものとなりつつあるが、その功績者の一人としての教授の果された役割はまことに大きい。

しかし、人類学教室のわれわれ後輩に対して渡辺教授は単なる専門的研究者としてよりはるかに大きな影響を与えられたと思う。それは何よりも、人類学という学問に対するすさまじいばかりの情熱と信念に裏打ちされた教育者としての態度であった。昭和14年に創設された人類学科の初代教授、故長谷部言人博士の高弟であった渡辺教授は、いわゆる長谷部人類学（ハセベイズム）の伝統を守り、人類学（生物としてのヒトの科学）における多様な方法論の平行的発展を望まれた。

人類は文化をもつ特異な動物であり、文化を発達させることにより自己の身体的特徴も変化した。つまり、文化により自然環境に変更を加え、これに適応するという形で人類は独自の進化をとげた。人類学の目的は自然科学の人間像をうることであるが、その接近法にはおのずから多様なものがあり、形態学、先史学、生理学など、いわば何をやってもよい。要は、“文化をもつ動物としての人類”との発想をもち、自発的にあたらしい分野の開拓をすることが

大事である、と教えられた。現在二講座しかない人類学教室で一種の研究室制度がとられ、形態、先史、機能、遺伝、生態の五分野の研究がまがりなりにも続けられているのは、このような理念にもとづくものである。

私共は、このような理念や学問論を教室で学んだというよりは、むしろ渡辺先生との個人的な会話を通じてより多く学んだ。先生は、小柄で貴公子そのままの風貌に似合わぬ酒豪であられたが、私共も学生時代に何回となく連れて行っていただいた酒席で主としてこれらの“教育”を受けた。先生と一緒に飲んだときに学問の話にならなかったことなど一度もなかったろう。料理には殆んど箸をつけずに杯（日本酒がお好きのようだった）を重ねつつ、学問とは何か、人類学はどうあるべきかについて熱っぽく説かれた。若気の至りで、率直に拝聴できずにあれこれと反論したり、ときには随分と失礼な発言もしてしまったが先生は一向に気をかけられぬごようだった。議論が嵩ずるとますますお飲みになるので、話しは堂々めぐりになることも多かったが、ほどほどにして切り上げることはお嫌いのようであった。やがて夜半近くの“魔の時刻”となると、突然会話がとぎれたかと思う間もなく、先生は坐ったま

ま眠ってしまわれる。しかし、一時間ほどで目覚められるのがふつうで、そこでお宅にお送りすることが多かった。

渡辺先生を語る時、奥様のことを忘れることはできない。先生と奥様のロマンスが小説になっている（阿川弘之著「春の城」）ことは知る人ぞ知るであるが、私共は奥様にも大層お世話になっている。夜更けに先生を送ったままあがり込む無礼なわれわれに対し、奥様が嫌な顔をされたことは一度もない。また、いかに遅くとも奥様は起きておられたようであったし、先生がすっかりお目覚めで、「飲み直す」と宣言されれば、突然の来客にもかかわらず、酒とまことに気のきいた肴がたちどころに出されるといふ手際のよさであった。家庭をもつてみて、このようなことがいかに並々ならないことであるかが、つくづく判ったことである。

酒を愛され、学生を愛され、学問を愛された先生から、私共は教科書からは学べない多くのことを学んだ。最近ではご多忙の上に健康上酒を控えられておられる由で、あまりご一緒する機会がなくなったことは残念である。いずれ折を見て、先生ご夫妻をご招待し、今までにご馳走になった分の何百分の一かをお返ししようと思っている。